『遺族会活動を始めて』

高知市　公文　功

私が遺族会の活動に初めて参加したのは全国戦没者追悼式で、平成二十一年のことでした。

この頃より、戦没者の孫世代らの参加者を広く応募していたように記憶しています。参加した遺族の方の人数をはっきり記憶していませんが、孫世代の方は私以外にも数名参加していて、日本武道館での式典、靖國神社への参拝と、全てが初めての経験でした。

その中でも遊就館の拝観は印象に残り、多くの展示品より当時の世相や戦地に向かう方々、それを見送る家族の想いを自分なりに感じ取ることが出来ました。

しかし、その思いも私が現在から見たもので、当時のほんの一部に過ぎないのではないかという忸怩たる思いもありました。

祖父は昭和十七年六月、大東亜戦争の戦地であったフィリピンのルソン島で亡くなりました。日支事変による上海方面への従軍に続くもので、祖父は三十三歳でした。

昭和十七年、日本軍は一月にルソン島マニラを占領、七月にはフィリピン全土を占領したとされる進撃を続けており、祖父は日本軍がその後敗戦を迎えるとは考えてなかったと思いますが、どのような思いでその地に居たのか考えると、複雑な気持ちになります。

一家の大黒柱であった祖父を亡くし、そこから先の生活が見通せなくなった祖母は、途方に暮れたといいます。田畑の作業などに男手がなく、親戚の人や近所の方々に助けていただいたり、色々お世話になったとのことです。

その年は父が五歳なる年で、祖父は父が小学校に通う姿を見ていません。それは祖父にとって心残りだったのではないか、父も小学校に通う姿を祖父に見てもらい、祖母もその日が来ることを思い描いていたのではないか、しかし祖父を無くしたことで家族としてできないことが数多くあったと思います。

その父も八十歳が近づこうとしている時、高知県遺族会が青年部を立ち上げるという話を聞きました。それまでにも父から声は掛けられていましたが、私の仕事が日曜日や祝日等、不定期で出勤することがあり、天候にも左右されるため直前にならないと予定が立たない状況で、遺族会活動の参加に踏み切れない要因でした。

そういう時期もありましたが、青年部の発足がきっかけで遺族会の活動

に参加するようになりました。
現在でも日曜日等の出勤はありますが、自分が出来る範囲で遺族会の活動に参加しようと考えるようになりました。
最初は青年部を組織するにあたり研修会を開いていただき、第一回は平成二十九年十一月でした。遺族会役員の方々より高知県遺族会の歩みや活動内容、組織について、また戦争体験、戦後の生活の思い出などを教えていただきました。以前から各支部で活動されている方も研修会に参加しており、私のように初めての参加者より多い印象を持ちました。
第二回研修会では、高知県護国神社の別役宮司より、護国神社の歩みと英霊顕彰について、第三回は高知県議会の桑名議員より、慰霊碑から見る歴史についての講演がありました。
その中で印象に残ったのは、慰霊碑の維持管理についてです。維持管理は各地の遺族会や自治会が行っているが、高齢化により維持が困難または限界であるとのことでした。慰霊碑の多くは戦後に建立されたそうですが、戦後七十七年、これから一層維持管理が重要になってくる中、限界まで来ている所があると聞くと胸が痛みます。
その後、高知県遺族会創立七十周年記念大会に於いて青年部（次世代の会）結成式の運びとなりました。
現在は「青年部（次世代の会）」として活動しており、活動の中で慰霊碑の清掃等を行っています。現在までに清掃を行った慰霊碑は管理が行き届いているようでした。活動を始めたばかりでまだ慰霊碑の現状は把握できていませんが、続けることで維持が困難になっている慰霊碑の実情が見えてくると考えています。
令和二年になり新型コロナウイルス感染症のため慰霊碑の清掃活動にも影響が出ています。少しでも多くの活動に参加し、慰霊碑の事を少しでも理解し、維持の手助けになればと思います。
また、青年部で活動を始めた時期から、フィリピン遺族会でも活動に参加しています。こちらでは、十月に開催されるフィリピン戦域戦没者慰霊祭に毎年参加しています。
慰霊祭には来賓の方を含め多くの遺族の皆様が出席されており、初めて参加した時はフィリピン戦域に限定された慰霊祭で、これだけ多くの人が集まるのかと驚きもあり、またそれだけこの戦域での戦没者が多いことを知りました。
慰霊祭では受付を担当することが多いのですが、まだ十分とは言えず、助けてもらいながらの状態です。
遺族の皆様がそれぞれの想いで出

席される中、多くの人と接することで知人や何らかの繋がりのある人に会えるのではないかと期待もあります。

また、いろいろな場で役員の皆様から声を掛けていただき、助かるのと同時にとても嬉しい思いです。

遺族会青年部で活動を始めて五年あまり、私も既に六十歳を超えており、決して若くはないのですが、遺族会の活動を少しでも長く続けるよう頑張ります。

※令和４年度「高知県フィリピン遺族会たより」に掲載の寄稿。